

## 18世紀下北方言の母音無声化 —付：A. タタリノフ『レクシコン』注釈7（C～T）—

江口 泰生\*

### 1 『レクシコン』成立の経緯

『レクシコン』とは1782年頃に成立した、アンドレイ・タタリノフ著、ロシア語・日本語対訳語彙集である。成立の経緯については、ペトロワの研究が詳しい。ペトロワ1962（O.ПЕТРОВА）“《ЛЕКСИКОН》 РУССКО-ЯПОНСКИЙ Андрея Татаринова”の解題（ИЗДАТЕЛЬСТВО ВОСТОЧНОЙ ЛИТЕРАТУРЫ, МОСКВА）や、江口泰生2013「ペトロワの『レクシコン』研究について（前）」『岡山大学文学部紀要』60や江口泰生2014「ペトロワの『レクシコン』研究について（後）」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』37を参照してほしい。

氏は『レクシコン』冒頭「A」欄外のメモ（以下①）を手掛かりに、当該書が1782年10月24日以前に成立したこと、「会議」議事録のなかにイルクーツク日本語学校のアンドレイ・タタリノフという人物が当該書を会議に提出したことを明らかにした。

① prés à la Conference 24 October 1782. (1782年10月24日の会議の記録)

次に『レクシコン』表紙の下にある序文（以下②）の、「AT」がアンドレイ・タタリノフのイニシャルであること、タタリノフが「さんばち」（サンパチ）という日本名を持つこと、「サンパチ」は「さのすけ」という日本人の息子であることを明らかにした。

② にぼんの／ひとさの／すけの／むすこ／AT／さんばち／ござり／ます

（／は改行）

ペトロワはさらにミハイル・タタリノフの文書「千島記」の付録「現在イルクーツクにいる日本人たちの知識について」に着目し、1744年11月24日に出航、1745年4月13日に棄船、5月16日に千島列島の第5島に漂着した船があり、その中にサンノスケ（サノスケ）という人物がいて、イワン・イワノビッチ・タタリノフという洗礼名を受け、1755年7月30日イルクーツクへ、1765年に逝去ということを明らかにした（以上、ペトロワ1962）。さらに「ロシア語の読み書きを息子に学習させることを許可してほしいという日本人イワン・タタリノフの請願書」を発見し、その上申書が1765年の日付を持ち、その請願書に13歳の息子（＝A・タタリノフ）のことが記されていることを明らかにした（村山七郎『漂流民の言語』による）。

出航地について、村山七郎は当初「出帆した港は酒田港である」と考えていた。村山七郎1963「ア・タタールノフの「レクシコン」の東北方言について—オ・ペトロワさんに与える—」『国語

\* 岡山大学大学院社会文化科学研究科。

18世紀下北方言の母音無声化一付：A. タタリノフ『レクシコン』注釈7（C～T）—  
江口 泰生

学』52。しかし1963年7月29日の東奥日報の記事「ソ連で発見された下北の方言④」で次のように述べる。「国立国語研究所の徳川宗賢氏が徳兵衛一行の漂流民の言語ではないかという意見を私に述べられ、これがきっかけとなって、ロシア側資料を詳しくしらべたところ、著者アンドレイ・タタリノフの父は徳兵衛配下に間違いなく、イルクーツク日本語学校教師たちがみな徳兵衛配下であることを見出した」。

こうして1744年11月24日（延享元年）に竹内徳兵衛一行の多賀丸が南部藩佐井（現：青森県下北郡佐井村）から出航（サノスケ倉）、のち遭難。1745年5月16日に千島第5島（オンネコタン島）に漂着。1752年にサノスケに息子A・タタリノフ（日本名サンパチ）が誕生。1765年にサノスケが請願書、直後に逝去。1765年にA・タタリノフ、イルクーツクの日本語学校入学。1782年10月24日にタタリノフ著『レクシコン』がアカデミー会議に提出、という経緯が明らかとなった。

## 2 『レクシコン』成立の体裁・内容

『レクシコン』は左欄にロシア語（以下、「見出しロシア語」とよぶ）、中央欄にキリル文字による日本語（以下、「キリル文字日本語」とよぶ）、右欄にひらがなによる日本語（以下、「ひらがな日本語」とよぶ）が位置する。日本語のないもの、一項目に二つの日本語があるものを数え、末尾の数字・助数詞などの羅列は省くと1026項目がある。

以下、所在はペトロワ1962前掲書に掲載の写真版の番号で示す。『レクシコン』は北村誠一・佐藤和之1989（「タタリーノフ『露日レキシコン』」（『文化における「北』』所収 弘前大学人文学部特定研究報告書）にもコピーが転載されている。

奥羽方言色が濃いのが、村山が下北佐井方言と限定した点には反論もある。北村一親2009（「18世紀のアンドレイ・タタリノフ露和語彙の研究（第2部）」『アリティス リベラレス（岩手大学人文社会科学部紀要）』84）は「佐井の言語は絶えず他の方言から改新を被る言語であり」、「汎北東北方言」的性格を有する言語であると述べる。たしかにそのような地域的特性は現在も引き継がれていて、高速旅客船が毎日青森市と佐井村を結んでいる。

さらに18世紀に特定の地域にのみ存在した語彙を『レクシコン』から指摘するのは困難であり、村山の方法や主張に批判があるのはもっともなことである。ただ筆者としては村山の主張どおり佐井方言を反映している点は疑いないと考えている。またタタリノフの態度としては、北村誠一・佐藤和之が述べるように、「よそ行きの言葉」も要素もあるが、「本人の発話意識とは無関係に、方言的発話や方言語形が表出した」という指摘が的を射ていると思う。『レクシコン』の語彙が寄せ集めではなく、単一の言語体系が基盤にあると思うからである。

本稿はこの点について、母音の無声化によって論じるものである。



### 3 『レクシコン』における母音の無表記

日本語をキリル文字で表記する際に見られる母音の無表記については、ペトロワに論がある。以下のように母音の消失として、その条件を記述している。

東北地方の方言では音節において母音が消失するのは次のとおり。キクスチツヒフ ki、ku、si、su、ti、tsu、hi、fuのあとに、カケコサセソタテトka、ke、ko、sa、se、so、ta、te、toが続いている場合。

くさい к с а й (=ksai) 「臭い」 (……以下、例省略)

村山七郎『漂流民の言語』はペトロワ説を妥当としながらも、次のようにも述べる。「狭い母音 i, uはs, ʃ, t, k, g (ママ) の前で縮約、無声化していた」。

両者の相違は母音の無声化の条件が後続母音の広狭に関与するかどうか、である。ペトロワは狭母音[i][u]を有する無声子音が広母音[a][e][o]を有する無声子音に続くとき、母音の無声化が生じるということであるが、村山は後続音が広母音[a][e][o]に限定されない、ということである。

そこで『レクシコン』に見られる母音の無表記を調査してみた。その用例を整理してみると、前掲の表のようになる。

表からすると、母音の無表記には少なくとも四つのタイプがあると考えたほうが良いのではなからうか。

一つは母音の無声化である。母音の無声化については、ペトロワ説を支持したい。原則ククスチフは無声子音+非狭母音(aoe)が後接したときに無声化する。これと相補的な関係にある、有声子音が後続した場合は無声化しない。後続母音がaoe以外の狭母音(iu)の場合、母音の無声化と相補的な関係となっていて、この場合、カタ行の有声化が生じている。以上は典型的な東北方言の母音無声化の様相と一致する。このような点からみて、『レクシコン』はきわめて東北方言的なのである。私は『レクシコン』が江戸時代の下北方言を非常に良く反映したものと考えており、このような文献はきわめて稀なので、大いに重要視すべきだと思っている。

二つ目は敬語が関与していると思われる。『レクシコン』には敬語が盛んに用いられているので、中央語の影響を被っていると考えざるべきもある。しかし語形は似ているが、敬語体系がまったく異なっているとみるべきと思う。すでに論じたことがあるが（江口泰生2013「レザノフ『日本語学習の手引き』第9章「会話」篇からみた18世紀末石巻方言の敬語」『語文研究』110）、東北方言の敬語は、聞き手に行為を要求したり（尊敬語）、聞き手にむかう動作の意志であったり（謙讓語）、聞き手への丁寧語に限られるのである。すべて話し手と聞き手との関係で生ずる敬語に限られる。「先生がいらっしゃいます」のような第三者に対する敬語が存在しないということである。この点、『レクシコン』も同様である。

また、敬語形式において（マス、ゴザル、シャル）の語末母音が表記されないが、これは語末の

狭母音が脱落していると考えられる。デス・マスに母音脱落が生じやすいことは従来からも指摘されているが（前川喜久雄1989「母音の無声化」『講座 日本語と日本語教育』第2巻「日本語の音声・音韻（上）」明治書院）、『レクシコン』でも共通の現象が見られるということである。すべての語末の狭母音に見られるわけではなく、敬語形式においてのみの現象であるので、敬語であることが発話において音韻的に有標として扱われているということである。おそらく敬語形式の語末拍の直前が強く発音され、その分、語末拍が弱化し、その結果、母音脱落が生じたと思われる。

三つ目は、これも先行研究に指摘があるが、シのあとにラ行音が接続する場合である（前川喜久雄1989「母音の無声化」『講座 日本語と日本語教育』第2巻「日本語の音声・音韻（上）」明治書院にも指摘）。

四つ目は「ズナ」（綱）のように、後続音に鼻音がある場合に母音が無表記であったり、無声子音が有声化表記になったりすることである。019a「канатъ（ロープ）、зна、つな」とある。「ズナ」（綱）であるが、語頭のツが母音が表記されず、かつ後続音がナ行なのに有声化している。これは『レクシコン』独自の現象で、もしかすると実際には「з у」のように母音を伴って表記すべきところをこのように表記しただけかもしれない。

しかしかつて述べたように（江口泰生2014「A. タタリノフ『レクシコン』注釈1（A～B）」『岡山大学文学部紀要』62）、この方言では鼻音が先行する単独母音を鼻音化することがあった。たとえば、ヤウニ→ヤヌニ、ビイドロ>ビンドロ、メイボニン>メンボニン（名簿人）、ナイギ>ナンギ（内儀）など。

したがって、この場合も鼻音によって先行音が濁音化されたり、先行母音が後続鼻音に吸収されたりすることがあったかもしれない。tsu˜na>tsũna>˜tsnna、shi˜ma>shĩma>˜shmmaなど。

だとすると、この方言では鼻音拍が様々な音韻現象に関与的であった可能性もある。高山倫明『日本語音韻史の研究』（ひつじ書房、2012）に、鼻音を持つ濁音をアクセントと同じような超分節音として捉えようとする試みがある。こういう指摘とも絡めて、そもそもこういう現象が本当にあるのかも含めて、今後なお良く考えてみたい。

付：『レクシコン』注釈7（C～T）

【C】						
753	033a	со\л/нце	(太陽)	Фй	ひ	フィ(陽)
754	033a	садъ	(庭)	іро йроно	いろ いろの	イロイロノ(色々の)
*村山1965脚注では「「いろいろの」は「色々の」であり、そのあとに「庭園」がついているべきものもがもれおちた。実はіро іроно кубоのつもりとする。						
755	033a	са\л/ всякій	(あらゆる庭)	іро іроно кубо	いろいろの つほ	イロイロノツボ (色々の坪)
756	033a	садъ я\б/лочный	(リンゴ園)	нариймоно кубо	なりもの つ ほ	ナリモノツボ(成 り物坪)
*ロシア語「садъ яблочный」を参照。						
757	033a	садовшйкъ	(植木屋)	нариймоно нарувто	なりもの な る ひと	ナリモノナルフ <sup>ト</sup> (成り物成る 人)
758	033a	са\л/даты	(兵士)	ашйгару	あしかる	アシガル(足 軽)
*ロシア語「солдаты」参照。ロシア語o→a。						
759	033a	сахаръ	(砂糖)	садо	さと	サド(砂糖)
760	033a	сарай	(納屋)	нійгай	にかイ	ニガイ(二階)
761	033a	сарай кйрпйш но	(レンガ造りの 小屋)	каварая	かわらや	カワラヤ(瓦 屋)
*ロシア語「сарай кирпично」参照。						
762	033a	сахаръ песочнои	(砂の砂糖 グラニュー糖)	сънано садо	すなの さと	ス <sup>ノ</sup> ナノ サド (砂の砂糖)
*ロシア語は「песочный」(砂の)参照。						
763	033a	сахаръ леденець	(飴の砂糖)	корй садо	こり さと	コリ サド(氷 砂糖)
764	033a	самъ	(彼自身)	теномайно	てのまいの	テノマイノ(手の 前の)
765	033b	садись	(座れ)	сварас шаре	すわらすしや れ	ス <sup>ワ</sup> ラス <sup>シ</sup> シャ レ(坐らっしや れ)
766	033b	чи санй	(ソリ)	キリル文字日本語なし	ひらがな日本 語なし	

767	033b	садокъ рыбей	(魚の養殖)	игесу	イけす	イゲス(生簀)
		*ロシア語「садок рыбей」参照。				
768	033b	садокъ птичен	(鳥籠)	торино су	とりのす	トリノス(鳥の 巢)
		*ロシア語「садок птичья」参照。				
769	033b	сапо̀\ж\никъ	(靴工)	фагймоно цугуру вто	はきもの つ くるひと	ファギモノ ツ グル フト(履 物作る人)
		*ペトロワ1962でたくさん単語を用いて一つの概念を表す例として指摘がある。				
770	033b	сапогй	(長靴)	кузу	くす(マ)	クズ(靴)
771	033b	сыплю	(細粒をまき落 とす)	магашймасъ	まかします	マガシマス°(蒔 かします)
772	033b	сыщу	(探し出す)	тазнемасъ	たつねます	タズ°ネマス°(尋 ねます)
773	033b	сало говя̀\ж\е	(牛脂)	абура	あふら	アブラ(脂)
774	033b	смеюсь	(笑う)	вараймасъ	わらいます	ワライマス°(笑 います)
775	033b	смйрный	(温順な)	шйзгана	しつかな	シズ°ガナ(静か な)
776	033b	смертный	(死の)	джйшй ішо	ちし いしや う	ヂシ イショ (十死一生)
		*村山1965は「十死一生」を宛てる。非常に優れた案だと思う。				
777	033b	смотри	(見ろ)	мйсас°шаре	みさしやれ	ミサス°シャレ (見さっしや れ)
778	034a	согрейся	(暖める)	нугида марасшаре	ぬきた まら すしやれ	ヌギダマラス° シャレ(温くたま らっしやれ)
779	034a	спотель	(発汗した)	аше таримашга	あせ たりま した	アシェ Тарима シ°タ(汗垂れま した)
		*ロシア語「с+потение」参照。				
780	034a	сокъ	(液 果汁)	кйно шйру	きの しる	キノシル(木の 汁)

18世紀下北方言の母音無声化一付：A. タタリノフ『レクシコン』注釈7（C～T）－  
江口 泰生

781	034a	сосна	(松)	мазу	ます (マ)	マズ (松)
782	034a	сосновое древо	(松の木)	мазуно ки	まつの き	マズノキ (松の 木)
783	034a	солома	(藁)	кара	から	カラ (穀)
784	034a	соль	(塩)	шйво	しを	シヲ (塩)
785	034a	солоно	(塩辛く)	шопай шйвокару гозарь	しやうは <sup>ゝ</sup> い しをかる こ さる	ショパイ シヲ カル ゴザル <sup>ゝ</sup> (塩っぱい 塩 辛く 御座る)
786	034a	соколь	(鷹)	тага	たか	タガ (鷹)
787	034a	соловей	(ナイチンゲール鳥)	сузуме	すつめ	スズメ (雀)
788	034a	соболь	(黒テン)	куррой кедамоно	くろい けた もの	クロイ ケダモノ (黒い獣)
789	034a	собака	(犬)	ину	イぬ	イヌ (犬)
790	034a	сука	(雌犬)	чйме іну	ちめ イぬ	チメ イヌ (雌 犬)
*東条操『全国方言辞典』には「ちめ 牝犬。めいぬ。盛岡 (御国通辞)。岩手県九戸郡」とある。						
791	034a	сорока	(カササギ)	онагадорй	をなかつとり	オナガドリ (尾 長鶏)
792	034b	свекла	(サトウダイコン)	агай дайгонь	あかい たい こん	アガイ ダイゴン (赤い大根)
*ロシア語「свёкла」参照。						
793	034b	сараньча кобы\л/ка	(イナゴ バツ タ類総称)	мушй	むし	ムシ (虫)
794	034b	сито	(ふるい)	корошй	ころし	コロシ (濾ろし)
*『日本方言大辞典』に「粉下ろし」の下位項目として本例が採録。						
795	034b	синея	(青)	асаги	あさき	アサギ (浅葱)
*ペトロワ1962で「鎖」でシベリア方言とするが、日本語と合わない。 村山1965は根拠は挙げてないが、「青い」とする。おそらく村山のとおりで、ロシア語は「синева」 (青)と対応しているとするのが良いと思う。						
796	034b	снастй	(海の索具類 船具)	фнадому	ひなとむ	フナドム (船ど も)



		*村山1965は対応する日本語は「船道具」とする。ロシア語は「снасть」(海の索具類 船具)であろう。「снасть」は通常複数形「снасти」で使用され、海の索具類を指すようである。 村山1965は「船道具」の訛りとするが、そうではなく、ここでは「船ども」と複数形で訳しているのではなかろうか。				
797	034b	сено	(干し草)	фигуса	ひくさ	フィグサ(干草)
798	034b	сено косять	(干し草の刈り取り)	кса карймасъ	くさ かります	グサ カリマス <sup>*</sup> (草刈ります)
*ロシア語「косить」(刈る)参照。						
799	034b	сенокось	(干草用牧草地)	кса карутогоро	くさ かるところ	グサ カルトゴロ(草刈る所)
800	034b	сенокосецъ	(草刈り人)	кса тагару вто	くさ たかるひと	ク <sup>o</sup> サ タガルプト(草田刈る人)
*ロシア語は「сено+косецъ」参照。『日本方言大辞典』ではカマキリをタガリムシ、「たかり(田刈り)」が「稲刈り」の意味の方言が愛知県や山口県にある。下北方言にも「タガル」(鎌で草を刈る)という動詞があったのではなかろうか。						
801	034b	семя всякое	(全ての種)	тане	たね	タネ(種)
802	034b	сера	(硫黄)	мазу яне	まつやね	マズヤネ(松脂)
803	034b	сера горячая	(可燃性の硫黄)	юво	ゆを	ユヲ(硫黄)
804	034b	стаканъ	(コップ)	чогу	ちやうく	チョグ(猪口)
*現代語のチョコ(猪口)はチョコ形がチョコになったもの。本来の語形を保っている。						
805	034b	столь	(テーブル)	фандай	はんたい	ファンダイ(飯台)
806	034b	столешница	(卓板)	іда	いた	イダ(板)
807	035a	скоть	(農業家畜)	чкуруй	ちくるい	チ <sup>o</sup> クルイ(畜類)
808	035a	скобель	(両手かんな なんきんがんな)	маіга\н/на	まいかんな	マイガンナ(前カンナ)
809	035a	стру\г/	(かんな類の総称)	ка\н/на	かんな	カンナ(かんな)
810	035a	са\л/фетка	(ナブキン)	тефуги	てふき	テフギ(手拭き)

811	035a	снопь	(束)	таба іжйва	たは いちわ	タバ イジワ（一把）
812	035a	суслонь	(畑に立てかけて干してある穀物束)	втошйма	ひとしま	フ°トシマ（一島）
813	035a	смерть	(死 終末 終了) (竜巻)	ниши	にし	ニシ(西)
<p>* ロシア語は「смерть」(死) 参照。  「西」は日没の方向にあたり一般に「死」を象徴する方角であるとされる。このことから「死」に「西」を当てたとも考えられる。しかし『レクシコン』の訳語の当て方にはそういった抽象的な当て方はあまり見当たらない。  Макс Фасмерの《Этимологический словарь русского языка》によれば、「смерч」と同義で「竜巻」「雲」という意味もある。  『日本方言大辞典』には「おーにし」という言い方で12月頃の西風を指す意味もあり、佐藤政五郎『南部のことば』（伊吉書院）にも「にし[風-西風]」という記述があるので、「ニシ」が大風を指す言い方があったと思われる。</p>						
814	035a	+смелый	(大胆な)	рйда (マ)	りは°とて	リイダ(立派)
*日本語は「ripna」（リップ 立派）の間違いか。日本語「りは°とて」は「立派とて」か。						
815	035a	скорый	(早い)	фаюи	はよい (マ)	ファヨイ(早い)
816	035a	стекло	(ガラス)	бйндоро	ひんとろ	ビンドロ(ビードロ)
*ペトロワ1962論文では鼻音表記とする。ビードロのイ母音が濁音の前鼻音の影響を受けて撥音化したものではなからうか。本資料にはナンギ(内儀)、メンボ(名簿)、ヤヌニ(矢うに)、ヒナナ(火麻縄)など、類例が多い。江口2014.12「A. タタリノフ『レクシコン』注釈1（A～B）」（『岡山大学文学部紀要』62）参照。						
817	035a	скатерть	(テーブルクロス)	кагемоно	かけもの	カゲモノ（掛物）
818	035a	ско\б/лю	(削る かんなをかける)	キリル文字日本語なし	ちやん	(瀝青 チャン)
<p>*村山1965欠。  キリル文字日本語がないのにひらがな日本語があるのは変だし、その日本語「ちやん」も見出しロシア語と対応していないのも変である。次行に書き込むのを間違えたと思われる。</p>						
819	035a	смола	(樹脂 タール チャン)	чанъ	ちやうん	チャン(瀝青 チャン)
*『日本国語大辞典』によれば「近世の和船や唐船の船体・網具などに用いる濃褐色の防腐用塗料。松脂・油・蜜陀僧・軽粉などをまぜ合わせ、熟してつくる。れきせい。」。						

820	035a	смолять	(タール分の多い泥炭を燃やす)	моемамасъ	ひらがな日本語なし	モエママス <sup>*</sup> (燃えます)
*ロシア語「смолякъ」参照。キリル文字日本語は「мае」を「мое」に訂正している。						
821	035a	скрыпка	(バイオリン)	кю̀г у	きやうく	キョグ(曲)
*ロシア語は「скрипка」(バイオリン)参照。						
822	035b	струны	(楽器の弦)	идо	いと	イド(糸)
823	035b	сундукъ ящикъ	(長持 衣装箱)	фаго	はこ	ファゴ(箱)
824	035b	сукъ	(枝)	фушй	ひらがな日本語なし	フシ(節)
825	035b	судно	(船)	фне	ふね(マ)	ブネ(船)
*ここは「ひね」とは書いていない。						
826	035b	сухо	(乾いた)	фймай	ひまい	フィマイ(干まい)
827	035b	сыро	(生焼けの生燻の)	кемудай	けむた <sup>ゝ</sup> い	ケムダイ(煙た <sup>ゝ</sup> い)
828	035b	серпъ	(鎌)	кама	ひらがな日本語なし	カマ(鎌)
<b>【T】</b>						
829	036a	твѣрдо	(固く)	тагай	たかい	タガイ(高い)
*「твёрдо」(強固に)参照。						
830	036a	тврьдять	(繰り返す)	фугушймасъ	ひらがな日本語なし	フグシマス <sup>*</sup> (復します)
*ロシア語「твердить」(繰り返す)参照。						
831	036a	тронъ	(王位)	кубосамано мет	くほさまの ところ	クボサマノメツ (公方様の所)
*キリル文字日本語は「место」(ところ)と書こうとしたものか。						
832	036a	тракть	(大道)	мй\д/жй	みち	ミヂ(道)
833	036a	тросъ	(杖葦)	цъве	つ江	ツウエ(杖)
834	036a	тесъ	(舅)	шудо	しやうと	シュド(舅)
835	036a	теща	(姑)	шудоме фафа	しやうとめ は>	シュドメ ファ ファ(姑母)
*ロシア語は「тёща」(妻の母)参照。						

18世紀下北方言の母音無声化一付：A. タタリノフ『レクシコン』注釈7（C～T）－  
江口 泰生

836	036a	тень	(影)	каге	かけ	カゲ(影)
837	036a	туманъ	(霧 もや)	моя	もや	モヤ(霧)
838	036b	табакъ	(煙草)	табагу	たはぐ	タバグ(煙草)
		*語末のオ段がウ段に狭まっている。				
839	036b	тавары	(荷物)	нимоць	にもつ	ニモツ <sup>*</sup> (荷物)
		*ロシア語は「товар」(商品 品物)参照。				
840	036b	топоръ	(斧)	масагари	まさかり	マサガリ(鉞)
841	036b	торъгъ, торжище	(売買 商売)	агйнай	あきない	アギナイ(商 い)
842	036b	товары всякия	(多種の商品)	іро іроно нимоць	いろいろの にもつ	イロ イロノ ニモツ <sup>*</sup> (色々の 荷物)
843	036b	то\л/сто	(肥満して 分 厚く)	шйрой	しろい	シロイ(広い)
		*ヒとシが混同したものか。「広い」か。ヒとシの混同したものに21a「足の裏」などの例もある。				
844	036b	тонко	(薄い)	фосой	ほそい	フォンイ(細い)
845	036b	топорище	(大斧 斧の 柄)	масагари даи	まさかり た い	マサガリダイ(鉞 台)
846	036b	тогда	(その時に)	сонотоги	そのとき	ソノトギ(その 時)
847	036b	тос\куеть	(憧れる 懐か しむ)	ачкодо шйру	あちこと し る	アチ <sup>*</sup> コド シ ル(案じ事 す る)
		*ロシア語は「тосковать」(滅入る 悲しむ)参照。『日本方言大辞典』に「あんじごと(案事)心配。心配事。気苦労」として東北各地に分布し、本例が採用されている。 小倉進平「仙台方言音韻組織」(『国学院雑誌』16-3、1910)にも「あちこと」の指摘がある。				
848	036b	то\л/каетъ	(押し出す)	осу ймасъ	をすいます	オスイマス <sup>*</sup> (押 すいます [押し ます])
		23b「ウズイマス」という日本語がある。「打ちます」に相当するとした。ここも「オスイマス」とあり、「押します」を表記したものと考えておく。				
849	036b	то\л/кнуль	(押し出した)	осуймайшта	をすいました	オスイマшта(押 すいました [押し ました])
		*日本語「マシタ」のシに母音表記されている。				

850	036a	туть	(ここで)	согони	そこに	ソゴニ(其処に)
851	037a	тыква	(カボチャ)	тоугва	とうくわ	トウグワ(唐瓜)
852	037a	тетеря	(やまどり)	кидуの「ду」の上から「жи」を上書きしてки жиに訂正している。	きつ;きち	キドウ キジ(雉)
<p>*村山1965に「ジの表わし方が動揺している」という指摘があるがどうだろうか。</p> <p>最初に「киду」と書き、そのキリル文字日本語からひらがな日本語「きつ」が宛てられた。次に、そのキリル文字日本語が誤りだと考えて「киду」の「ду」の上から「жи」を上書きして訂正して、それを反映して「きち」というひらがな日本語が宛てられたと考えられるのではなかろうか。最初の「киду」は誤りだと考えられる。そもそも日本語のヅ(ズ)は「дзу」「зу」で表記されるのが普通であり、「ду」で表記することはない。</p> <p>また佐藤『南部のことば』によれば「きじ この地方、古くは山鳥をも、雉と呼んでいた」とあるので、適訳だと思われる。</p>						
853	037a	тепере	(今)	іма	イマ	イマ(今)
854	037a	ташатъ	(引きずる)	фугімасъ	ふきます	フギマス <sup>o</sup> (引きます)
*「тащить」(引く)参照。						
855	037a	тамаръ	(矢)	я	や	ヤ(矢)
<p>*ペトロワ1962では「тамаръ」(先端に齒のついた矢)でシベリア方言とする。</p> <p>『教会スラヴ語ロシア語辞典』ではロシア語綴りは「томаръ」。ロシア語o→a。</p>						
856	037a	терка	(おろし金)	дайго орошй	たいこをろし	ダイゴ オロシ(大根おろし)
<p>*ロシア語「тёрка」(おろし金)参照。</p> <p>31bには「ダイコン」の語形もある。『庄内浜茨』には「だいこ」の語形がある。</p>						
857	037a	терпугъ	(石目ヤスリ)	ясурй	やすり	ヤスリ(ヤスリ)
858	037a	тесла	(手斧)	жоона	ちやうをな	ジョオナ(手斧)
<p>*ロシア語「тесло」(手斧)参照。ロシア語o→a。ペトロワ1962ではシベリア方言で「手斧」の意味とする。</p> <p>中央の語形は「チョウナ」なので、語頭が濁音化したものか。</p>						
859	037a	тетка	(叔母)	умба	うむは <sup>o</sup>	ウムバ(乳母)

(つづく)

付記 平成26年～平成28年度「十八世紀青森下北方言を反映するタタリノフ『レキシコン』についての文献方言史的研究」(課題番号26370536)の支援を受けた。記してお礼申し上げる。